



秘めたる蕾、啄むモノは……。

メバエ

〓〓登場人物〓〓

高杉徹…鬼瓦校、二組。萩千夏とは家が近く、行事などで一緒になることが多い。

常盤祐樹…二組。徹のクラスメート。徹とよく一緒に居るが、その理由は彼の周りに来る女の子に対し下心を持って眺める為。スケベで卑怯者。

遠藤滯…二組。背が小さく怖がり。性的知識が乏しく、悪戯をされても頓着が無い。

畑中裕也…一組。スケベでズルイ。

若林芽衣…一組。いじわる。中倉綾子とは対立している。

菅井麻帆…二組。滯の友達。虫が苦手。真奈や百合子に比べるとそうでもないが、そこそこ。滯がはしやぎすぎるせいで世話役になりがち。大人しい印象を受けるが、別段そういうわけでもない。性的な興味は人並み。

萩千夏…三組。気が強く活発。徹のことが好きで、一緒に居られるように何かと構う。最近胸が育ち始めているのでわざとひつついたりして誘惑する。が、実を結ばない。その理由を真奈の存在と逆恨み中。

佐原みなみ…三組。のんびりした性格。他の子に比べてむっちりしている。おっぱいが大きく、クラスメートから下心の視線で見られている。気が優しく強くなり出られず、セクハラをされても笑ってごまかしてしまう。エッチなことについては照れるけれど、ほのかな快感を戸惑いながら受け入れている。

錦織満…三組。金持ちのボンボン。同じクラスの吉川雄二と同じく金持ちなのだが、デブで性格がわるいこともあって人気は無い。スケベで女子の着替えを覗いたりしている。

若竹則武…三組。親が満の親に世話になっているため、仲良くしている。勤が良く、余計なことに気付いてしまうが、引っ込み思案な気質のせいで何もできない。担任の志垣隆について不信感を持っている。

井上美優 三組。頭の軽い女子。吉川雄二に片想い中。いじわるな面もあり、満などは完全に無視している。佳代を自分の引き立て役として連れていく。自分より人気のある女子に嫉妬している。

菱沼佳代 三組。美優の友人。彼女の行き過ぎたいじわるを咎める良心は持っている。おとなしめで地味な印象が強い。

くくクラスくく

一組 畑仲裕也、若林芽衣、菅井麻帆

二組 高杉徹、常盤祐樹、遠藤滯

三組 萩千夏、佐原みなみ、錦織満、若竹武則、井上美優、菱沼佳代

くく宿泊部屋くく

松の蔵 畑仲裕也、高杉徹、常盤祐樹、錦織満、若竹武則

竹の蔵 萩千夏、菅井麻帆、遠藤滯

梅の蔵 若林芽衣、佐原みなみ、井上美優、菱沼佳代

四月の終わり、桜もすっかり青々とした葉に代わり、眩しい日差しを和らげてくれる。清々しい空の青が広がる快晴に徹達のクラスは賑わいでいた。

もうすぐ五月の連休が来る。宿題は増えるものの、徹には一つ楽しみがあった。

それは碌法寺での寺子屋合宿だ。

古くは村人の子に読み書きを学ばせるために梅雨の日に碌法寺の和尚さんが始めたのがきっかけで、現在も村に残る。

今は進学を前に一つの区切りとして行われる合宿として姿を変えていて、補習に近い内容を行う。

それだけなら学校がお寺に変わったただけだが、合宿という言葉のとおり、お寺でお泊りがある。

野外活動や修学旅行と違い、目を光らせる先生がいない。つまり、夜遅くまで友達同士でいろいろ悪さができる。そういう魅力があった。

お寺の位置する俵禄山はハイキング兼アスレチックで遊ぶことができ、山で採れる山菜を使った炊き込みご飯が美味しいと評判だ。

他にも露天風呂があり、普段と違った大きなお風呂を楽しめる。

徹達も先輩達から聞いた話が羨ましく、かなり期待していた。

〳〵碌法寺 寺子屋合宿 参加者〳〵

一組・畑仲裕也、若林芽衣、菅井麻帆

二組・高杉徹、常盤祐樹、遠藤滯

三組・萩千夏、佐原みなみ、錦織満、若竹武則、井上美優、菱沼佳代

合宿を前に掲示板に参加者が張り出されていた。

「ふーん……」

徹は希望者を見て意外だと思った。

運動嫌いの昭はともかく、真奈や健介が参加していない。半年前までは一緒に行こうと話していたのにと、残念がっていた。

「なんだよ、健介も真奈も」

つい批難めいた口調で言うと、健介はすまなそうに手を合わせて頭を下げる。

「すまん、親戚の法事と重なっちゃってさ。別に俺なんて行かなくていいのにな」

「わたしも従兄の結婚式に呼ばれちゃって……。県外だから参加無理だし」

「二人とも予定ありか。羨ましいな」

「まあいいじゃない。俵禄山のごはん、美味しいって聞くし、お風呂だって温泉だし

よ？」

「そりゃそうだけど……」

困ったのはメンツ。女子ばかりいる。

特に面倒なのが三組の萩千夏。徹と彼女は村内の区割りと一緒に、夏休みなど行事があると必ず顔を合わせる。そしてその都度、あれがだめ、これがだめ、おそい、はやくしろと急かされたりダメだしされたりと忙しい。そんな彼女と一緒にだから憂鬱だ。

「おー、良かった。参加できたじゃん！」

そんなことを思っていると、元気そうな千夏の声が出た。

「良かったね、千夏ちゃん」

佐原みなみと一緒に萩千夏が掲示板を見に来ていた。

千夏はボーイッシュなショートヘアの子。少しつり目がちな瞳が印象的で、長袖長ズボンだと男の子に間違われる。休み時間や休日などは女子よりも男子に交じって外でスポーツをすることが多く、男友達として扱われる子。

それでもやや膨らんできた胸元と、オシリの丸みを見ると女の子だとわかる。最近はその意識してしまう子が居り、バスケットボールなど身体がぶつかるスポーツの場合、緊張して固くなり、ボールを取られて嗤われてしまう。

そんな時、その笑顔が可愛らしく、恥ずかしさからか下を向いてしまう子も多い。

「何よ、徹も来るの？ あーあ、あんたが来るとチビがうつるわ」

「うつるわけねーだろ。だいたいお前だってチビだし」

背丈は徹と同じか、少し彼女が大きいくらい。

千夏はにやりと笑って徹の正面に立ち、鼻先がぶつかるかもという距離で背を比べる。

「あたしの方が大きいよ〜だ」

にこっと笑う千夏は笑顔にどきまぎする。彼女がわざわざ胸を張るものだから、胸同士が触れてしまって、少し柔らかな印象を受ける。

骨と皮の間に少し詰まっている程度。それが一昨年の印象だったのに、今はこんなにやらかましゅまるぐらいの弾力と柔らかさがある。

それに少しい匂い。

甘くてふわっとする感じ。たまに真奈からもする。図書館で奈々と一緒に居る時も感じるモノ……。

「うるせーな」

徹は気恥ずかしさから背を向け、そのまま歩き出す。なんとなく身体がむず痒いような気がする。特に股間の辺り。

最近よく感じる身体の異変は、保健の授業であまり詳しく教えてもらってない。

「逃げるなよ、ちーび！」

投げかけられる言葉よりも、もっと重要な性徴……。

合宿当日、村営バスに揺られて山の上の碌法寺へ行く徹達。

揺られること一時間、山道の中ごろにある停留所で降りた。

そこから徒歩で十五分、竹林の道を進む。

初夏に向かう風に竹が揺れ、サラサラと音を立てる。

「へえ、なんか涼しいね……」

目を瞑り耳に手を当てる千夏はうっとりとした様子で呟く。

「騒がしいだけじゃね」

首を傾げる徹の後頭部に「つんとげんこつ」が落ちる。

「もう、あんたには風情ってものが無いの？　ほんとつまらない男ね」

「いってーな、この暴力女！」

むっとして言い返す徹に千夏はぷいっとそっぽを向く。こういう生意気なところと乱暴なところが非常に腹立たしい……と思っていた。

「まあま、高杉君も落ち着いて。ね？」

ほんわかした雰囲気佐原みなみが仲裁に入ると、徹も強く言うつもりになれなかった。

「ったく、みなみが言うから許してやるんだぞ」

徹はそう言う足早にお寺の方へと向かって行った。

お寺では住職の原口巖が待っていた。

この暑い中、彼は紫の法衣を着ており、禿げ上がった頭に光る汗をハンカチでしきりと拭いていた。

「やあや、よく来たね。碌法寺にようこそ」

「「よろしくおねがいします」」

徹達は声を揃えて告げると、頭を下げる。

「それじゃあ早速荷物を置いて、本堂に集まりなさい。麦茶を用意しているよ」

「はい」

各自水筒を持ってきていたが、冷えた麦茶があるのであればと、皆いちもくさんで宿となる離れへと走った。

部屋分けは男女別で、

松の蔵…畑仲裕也、高杉徹、常盤祐樹、錦織満、若竹武則

竹の蔵…萩千夏、菅井麻帆、遠藤滯

梅の蔵…若林芽衣、佐原みなみ、井上美優、菱沼佳代

となった。

松竹梅は部屋のグレードではなく、蔵の隣に植えられた木によるもので、他に差があるとすれば日差しぐらい。

本堂のすぐ隣に松の蔵があり、少し離れた場所に竹、梅の各蔵があった。

蔵と呼ばれるのは、かつて蔵として使っていたからで、今は一階と二階が居住区として使われている。

松の蔵の一階には土間とたたみ畳の広さがあり、二階は八畳程度の広さ。急な階段を上るとやや明かりの少ない板の間に出て、そこに畳と布団が準備されていた。

「よっしゃ、俺二階な！」

裕也は荷物を抱えて階段を上がると、荷物を二階の奥へと投げる。

「おいおい、ずるいよ。僕も……」

錦織満が汗だくになりながら文句を言おうとするが、彼は急な階段を見て震える。

「……僕は二階でいいや。武則も一階でいいよな」

「うん」

武則は頷き、しぶしぶ荷物を一階の土間に置く。

「徹、みろよ」

「なんだよ」

裕也に急かされ、徹も二階へと上がる。

開け広げられた窓から見る景色は爽快で、鬼瓦山と鬼瓦神社、鬼瓦村が一望できた。

「おお、すげーな。これは気分いい」

竹林を眼下に望み、先は雄大な山々が広がる。普段何気ない気持ちで暮らしている自分の住む村がこんなに小さなものなのかと思うと、勘違いでも自分が大きくなったようで気分が
良い。

「それよりよ……」

裕也はにやつきながら下を指さす。

「なんだよ」

示された方を見ると、そこには竹作りの屋根と、岩作りのお風呂が見えた。半そで半ズボン、はだしの男性が首に手拭いを巻いてデッキブラシを振るっているところが見えた。

「へえ、広くていいな」

のんきな感想を告げる徹に裕也は肘で横腹をつついてくる。

「ちげーだろ。のぞきだよ、のぞき」

「え……おい、お前なあ……。つか、参加女子見てそんな気持ちになれるか？」

「男のロマンだよ。みたいじゃん、みたいじゃん」

妙な笑いかたをする裕也を余所に、徹は妙な安心をしていた。それがなになのか？ 参加

者に気になる誰かが居なくて良かったという気持ち……。

「おい、だんしく！ 手伝ってよ〜」

窓の下から千夏の声がした。

「お？ どうした？」

覗きの話を膨らませるつもりになれず、徹はちようど良いと階段を降りた。

「どうした？」

徹が千夏の元へ来ると、彼女は箒とチリトリ、他に袋を持っていた。

「泊まる前に掃除するんだけどさ、蜘蛛の巣があって、それ取って欲しいのよ」

「くものす〜？ 箒でちよちよいだろ。なに女の子みたいなこといつてるんだよ」

「女の子です〜！」

「こういう時ばかり……」

「そりゃあたしは平気だけど、かな〜り虫が苦手な子もいるんだってば。知られる前にちよちよとやっておいてほしいのよ」

参加者の名前を思い出す徹。確か菅井麻帆が参加していた。

普段の彼女は真面目で大人しく、話しやすい良い子だ。今回の寺子屋合宿も友達の大遠藤滯の面倒を見るために参加したのだろう。ただ、彼女には大きな弱点がある。それは虫が苦手ということ。鬼瓦村では珍しく虫がダメで、理科の時間などで虫の観察などあるう日には保健室に逃げたり、しまいには欠席してまで拒否を示す。

以前、男子がイタズラ半分で彼女に虫のおもちやを投げたところ、喚き散らして教室を出て、しばらくは収まらなかった。

そんな彼女が蜘蛛を見たらどうなるか？ 碌法寺のような人里離れた山間となれば通常の三倍盛の大きさのジョロウグモが顔を出すかもしれない。となれば麻帆のパニックも……。「ああ、なるほど。そりゃしかたないわな」

小声で話す千夏になるほどと頷く徹。蜘蛛如きに怯えて騒がれたり、最悪ホームシックにならねば面倒と徹は箒を受け取る。そして早速二つの蔵へと走った。

梅の蔵は松と同じ作りで、見える景色もほぼ一緒だった。露天風呂が見えない位置であり、松の蔵も見えない。

徹は天井に見えた蜘蛛の巣をくるくるつと箒ではらい、外に捨てる。やってきた千夏に確認してもらい、その間に梅の蔵へと走る。

「ちよととまった〜！」

竹の蔵の前に居た麻帆を呼び止めると、急いで蔵へ入り、扉を閉める。

「高杉君、どうしたの？」

「ちょっと待ってる。箒を持ってきただけだから」

「それなら別に閉めなくても……」

扉が開かれると、徹が一人で天井に向かって箒をくるくる回している。

「何してんのあんた？ 魔法使いにでもなったの？」

若林芽衣は不機嫌そうに言う。彼女は基本、タイプでない男子にはきつい態度を取る。

「千夏に頼まれてクモ……おまじないをしてるんだって」

「おまじないって……あんたなんかおかしなこと考えてない？」

「おかしなってなんだよ。俺はそんなこと」

「あー、怪しい。もしかしてあたし達に夜這いするために下調べしてるとか？」

「あのなあ！ 俺はそんなことしねーよ。ただこうやって……こうやって……」

クモという単語が出かかり、何か話をそらそうとするが急なこともあって思い浮かばない。そのまま箒をくるくる回しながら、ふざけたふりをして部屋を出ようとする徹。しかし、箒の先からつーっと糸を伸ばして降りて来る虫が居り……。

「きゃ！ くも！ やだ、何してるのよ！ いやだ！」

遠藤滯の眼前に降りる蜘蛛。彼女は軽いパニックを起こしてすぐ近くの菅井麻帆に抱き着く。

「やだ、ちょっと！ こっちだってこまるってば！」

二人ともその場にしりもちを着き、ぶるぶる震える。

「ちょっと徹！ なんのつもりよ！ あんたさいてー！」

若林芽衣は徹を睨むが、彼としても思わぬハプニングにどうしたものかと手が出せない。

「ちげーよ。俺は箒で蜘蛛の巣を取ってって千夏に！ おい、二人とも落ち着けよ」

「やだ、なんか背中動いた！」

「え、うそ、やだやだ！ とって！」

「違うって、それはお前の髪の毛」

徹は滯の背中に乗っていた蜘蛛を箒で払いのけ、とりあえず引き剥がす。もう一人の方はとしげしげ見つめるが、特に見当たらない。

「もう大丈夫？」

「ちが、や！ うそ、なんか服の中で動いてる！ どうしよ！」

「麻帆、落ち着いて。とりあえず住職呼んでくる？」

蜘蛛が取り除かれたことで正気を取り戻したように見えた滯だが、まだ混乱しているらしい。滯はそのままお寺の方へと走って行ってしまった。

「落ち着けよ。ぼーさん呼んできてどうすんだっての」

「徹君のせいでしょ！ ねえ、取ってよ、きゃ！ やだ、服の中に入った！」

「とにかく落ち着けよ。そうだ。風呂場でシャワーを浴びて来いよ。そうすれば蜘蛛だっ

て……」

我ながら名案と思えば麻帆を立たせるが、彼女は首をぶんぶんと振る。

「やだ、クモが居るのに歩きたくないよ。なんかぶちゅってつぶしちゃいそうだってば。お願いだってば、取って！ 徹くん！」

懇願するように徹を見上げる麻帆。もうそろそろ泣き出しそうな彼女に、徹は頷く。

「わかったよ。じゃあ、今どこら辺にいるんだ？」

「えっと、お腹？」

麻帆はシャツを捲りあげて徹に向きなおる。しかし、そこには彼女の目焼けしつつあるお腹があるだけ。

「ひっ！ また動いた。ちょっと上っぽい……」

「え、でも……」

そこから上となると、それは胸元になる。さすがに徹は抵抗があり、口もる。

「いいから、お願い」

けれど蜘蛛への嫌悪感が勝る麻帆は、徹に縋るしかない。

「わかったよ。蜘蛛を取るためだから……」

「うん、おねがい……」

右手をシャツと彼女の肌の間に差し込む。

「ひい……」

彼女の肌に触れる。

やや汗ばんだ肌は少し冷たい。それに柔らかく、弾力がある。

麻帆は女子の中では中くらいから少し背が高いくらい。それにもない胸元、おしりの成長の兆しが見えており、今もシャツ越しに胸のふくらみが見えて、徹を躊躇させた。そこに手を忍ばせれば、当然胸のふくらみに触れることとなる。

シャツ越しに触れると、着やせというのだろうか、見た目より大きく育っているのが感じられた。

「どう？ 取れた？」

「わかんね……えと、えっと」

「気にしないでいいから、さっさと取って。お願い」

彼女も多少の恥かしさがあるが、それでも照れて遅々と進まない徹を急かす気持ち強い。

「……えと、なんかあったかな……」

肌をさすりながら移動する。

あまり強く押さないように、蜘蛛を見逃さないようにさする。

「……あ……ん」

「痛い？」

「ん？ 違う。くすぐったくて……」

ふうっという鼻息に何か痛かったのかと勘違いして彼女を見ると、麻帆は唇とすぼませ、視線を細めていた。

「ねえ、早くしてよ……」



「すまん……えっと、あ、なんかあった……これか？」
指に何かが触れる。徹はそこが蜘蛛かと思い、人差し指と中指でつまみ、そのまま引く張る。

「あ……やだ……んっ……ちよ……つと……ねえ、てつう……」

「ん？ あれ、違った？ ……ぐ、ごめん……！」

徹はぱっと手を離し、背を向ける。

自分が今触れたモノ、つまみ、引く張ったのは、彼女のおっぱいにある部分。

「やだ！ えっち！」

「あ、いや、すまん」

「……もう。最初からそのつもりだったんでしょ？」

「ちが……違うけどよう……。悪かったよ。ほんとごめん……」

徹なりに言い分はあるが、分が悪いことも理解している。言葉を飲み込み、とりあえず怒られる覚悟だけはする。

「んもう……え、あ……うそ……やだ……！」

「どうしたの？」

「ね、徹君……あの、あの……」

麻帆は立ち上がり、スカートを下ろす。

白を基調としたピンクのハート模様のパンティ姿があった。



「ちょ、なにしてるんだ」

徹は思わず麻帆の下着姿を見てしまい、そのまま釘づけになってしまう。

「くも、くも……やだ、おねがい……」

「どこにいるんだよ」

「たぶん、おしり……おし、おしり……」

「え……オシリに？ うそだろ、どうやって移動したんだよ」

徹は彼女の後ろに回り込み、オシリを見る。

パンティのギャザーの部分に髪とは違う一本の線が見える。それは不自然にカクカク動いた。

「おねがい……徹君、とって……」

「んでも……」

「おねがい、やだ、気持ち悪いの……」

「わかったよ……」

徹は指を伸ばすと、それを掴む。彼としても蜘蛛は素手で触りたくないのだが、今はそれを言っている場合ではない。むしろこのまま放置してしまったら、何を言われるかわからない。

「あれ……」

しかし、足はぼきんと折れてしまい、中に潜り込む。

「中に入った？」

「わかってるってばあ……もうやだあ」

麻帆は半べそをかきながらパンティをずらす。

日焼けしていない白い肌があらわになる。先ほど少し触れてみたが、しっとりとしてすべて、柔らかくて気持ちが良い。そんな肌だった。

「すぐ取るから、すぐ終わる……」

息をのむ。こうして女の子のオシリを間近で見るとは初めてのことに。普段は水着や体操着に隠れてお目にかかることなど無いオシリ。丸みを帯びつつあるそれは甘みを放つ果実のようで徹の視線を集め、自然と彼を寄せ付ける。

甘い臭い。女の子の臭いをかぎ、くらくらと眩暈のようなものが起きた。

徹は頭を振り、色白のオシリを蠢く蜘蛛を押さえつける。

「ん……」

指が麻帆のオシリに触れる。

ちよっとだけ、悪戯心が湧いて指に力を入れてしまう。

柔らかい。しっとりしていて、とても良い肌触り。

高級シルクのハンカチのような感触にすっと指を滑らせ楽しんでしまう。

「あ……ん……んっ……」

麻帆が低く呻く。

「よし、取れたわ……」

「そ？ そう……そっか、ありがと……」

麻帆はべたりとその場に座り込むと、ぼろりと涙をこぼす。

「おい、泣くなよ……」

そうはいいつつ、仕方ないと思い、彼女の背中をそっと撫でてしまう。

「ひっぐひっぐ……きもちわるかったよう……」

「悪かったよ。でも、本当に悪気があったわけじゃないんだ」

「そうじゃなくて、蜘蛛気持ち悪くって……。徹君、ありがと。蜘蛛の巣を取ってくれて。

でもでも……ひっぐひっぐ……」

麻帆は物わがりの良い子なのだが、虫が絡むと途端にダメな子になる。恐怖と嫌悪感を整理できるはずもなく、ぼろぼろと涙をこぼしていた。

「うん、まあ、落ち着くまで待つから、な」

下手に泣くのを止めるよりはと、徹は彼女の頭を撫でていた。

「うん、うん……ひっぐ」

その裏で、まだパンティ姿の彼女を盗み見てしまう。

少し前まではちんちくりんという言葉が似合う麻帆が、いつの間にかおっぱいもお尻も膨らんでいる。実際に触れてみると弾力と柔らかさがあり、良い香りのする女の子になってい

た。

盗み見る内に気持ち昂り、彼女の頭を撫でる手に力がこもる。衝動的にそのまま抱きしめてしまいたくなる気持ちを抑え、ようやく顔を背ける。

「な、下、穿こうぜ」

「うん、あの、えっと……」

「どうしたの？」

「なんか、足が震えて立てないの」

「まじかよ。じゃあ、肩貸すからさ……」

「ありがと」

麻帆は頷き、徹の肩に掴まると、引っ張られるように立ち上がり……、まだふらつく足がよろめき、箒の方へと倒れそうになる。

「あ」

「わ……」

また蜘蛛騒動になつては一大事と、徹は彼女を支えようと、下に潜り込み、箒を蹴る。

「わたた……」

なんとか蜘蛛との第二次接触を防いだ徹だが、今度は少し汗の匂いとおしっこ臭いとクariumのような臭い。

「え？」

視界には青と赤のストライプの布に白い肌と日焼けしつある小麦肌。頬と唇に感じるすこしひんやりしっとりした感触は先ほど指で楽しんだもの。

「あ……」

麻帆が徹の顔に跨る格好になっていた。

「ご、ご、ごめんささい！ ごめんごめん！」

麻帆は自分の状況を知るやいなや立ち上がり、後ろを向いてしまう。

徹は彼女の柔らかさを頬で感じ、胸いっぱい甘いクリームのような体臭を吸い込んでしまい、どぎまぎしていた。

お互い、顔を合わせられない。そんな時間が過ぎた後、扉が開く。

「大丈夫？ 蜘蛛が麻帆にくっついたって……え？」

戸を開けてやってきた千夏はパンティ姿の麻帆を見て、眉間にしわを寄せる。

「……ちよっと徹、どういうこと？ 事と次第によってはあんた、夜中まで座禪を組んでもらうからね！」

「これはその、事故で……」

「問答無用！ ここになおれ、そのスケベな心を性根ごと叩きなおしてくれる！」

「なんだよそれ、聞いておいて問答無用かよ！」

近くに会った箒を掴むと千夏は徹に殴り掛かる。徹はまた蜘蛛によるパニックが起こされるのではないかと気が気でなかった……。

荷物を置いて本堂に戻った徹達は冷たい麦茶を飲んでいた。

「おい、どうかしたのか？ 徹」

祐樹が徹のぼろっとした雰囲気を見て訝しみ尋ねる。

「いろいろとあってな。誤解が招いた悲劇だ」

「ふうん」

祐樹は気に留めず、麦茶をぐいっと飲む。

「さてと、それじゃあ夕飯までの間に蔵の掃除をお願いしようか。なに、軽く箒で掃いて、布団を干すだけだ。その間にお風呂の準備と夕飯の準備が終わるから、掃除が終わったら、また本堂に集まってくれ」

「はい」

一同は頷くと、掃除用具を受け取り分担の場所へと移動した。

十

散らかった箒とチリトリを拾い集めるみなみと武則。他の面々はどこかへ行ってしまい、戻って来る様子も無い。よしんば戻ってきたところで、落ち葉をまき散らして遊ぶだろうと、二人で掃除を続けていた。

「よいしょっと。はい、おしまい」

大方の花びらを拾い集め、最期に袋に入れて縛る。

「じゃあ、そっち持って。落したら大変だし、一緒に持って行くか」

大きさの割に重くないので一人で持てそうだったが、みなみは心配性らしく武則にもう片方を持つように言う。

「あ、うん」

言われるままに結び目を持つと、みなみと手が触れた。

「あ……」

「ん？ どうかした？」

「その、手が」

「手が？ どうかしたの？ ささくれでも刺さった？」

みなみもわかっているはずなのに、彼女は気にしていない。

彼女の小さい指。ちょっと冷たい。汗ばんで無い指。少し指が触れる程度。

クラスで一番、学年で一番優しい雰囲気のみなみ。体育などで武則が無様に転んだ時も、皆が唾う中、彼女だけは優しくしてくれた。そんな彼女が気になっていた。

だから手が触れた時、意識していた。けれど、肝心のみなみは……。彼女は気にして無いのだ。嬉しいと思っただけで済んだ。

本堂裏手のゴミ置き場に袋を捨てると、少しのつながりともお別れ。手を繋いで帰るような関係でも無しと、武則は指先を見ていた。

「さ、道具片づけないと……」

「うん」

箒を手にして倉庫に向かう。すると、向こうから険しい顔の裕也がやってきた。

「あれ、裕也君、どうしたの？」

「ああ。ったくよー、和尚さんにみつかっちゃまって怒られたんだよ。掃除手伝って来いってさ」

「そうなんだ。でも、もう終わったよ」

「そうなの？ あーあ、でもこのまま何もしないとまた怒られるから、片づけぐらいはやるよ。貸しな」

裕也は武則から箒を奪うとみなみに首で案内しろと指図する。

「あ、裕也君」

「なんだよ。これは俺がやつといてやるから、お前はさっさと和尚さんのところ戻ってろよ。あと、俺がちゃんと掃除手伝ったって言えよな」

面倒そうに言い捨てる裕也は彼の返事など待たずにみなみと行ってしまふ。

「わかったよ……」

反論も反抗することもできず、武則は本堂へと戻った……。

十

倉庫へ向かった裕也は適当に箒を投げ捨て戻ろうとした。

「だめだよ、ちゃんと立ってかけておかないとまた怒られちゃう」

みなみはやんわりと指摘すると、裕也も少し考えて拾い直す。

「どこ置けばいい？」

倉庫は暗く、天窓から差し込む明かりでなんとか見える程度だった。

辺りを見回しても箒らしいモノは無く、代わりに階段がある。

「こっただよ」

みなみがチリトリをもって二階に行こうとしているので、それを後ろから着いていくことにした。

木造の階段は採光性の為なのか立て板が無い。なので歩くたびにみしみしと軋み、中央が少しへこむように歩きにくかった。

「なんか怖いよね」

みなみがおっかなびっくり歩くせいで遅々として進まない。

「怖くないだろ、こんなもん」

いらつきながら前を見ると、そこにはピンクと白のストライプ模様があった。

「!？」

彼女が歩くとひらりとショートパンツが揺れ、ちらりと見える。裕也はたちまち目を丸くひらき、鼻息を荒くさせる。するとつんと酸っぱい臭いが鼻に突いた。

「揺れるし暗いし、ちょっと歩きにくいよ。ごめんね、裕也君が先に行けばよかったかな」

「いや、大丈夫だ。ゆっくりでいいから安全にいけ。安全第一だ」

裕也は一步下がり、上を見る。

ぷりっとした丸いオシリを包むピンク色の布。彼女が歩くたびに股の間がしゅっしゅとこすれるのが見える。

——佐原の奴、気付いてないのか……。

箒を伸ばし、そつとショートパンツをめくる。階段に気を取られている彼女は気付くこともなく、そのパンティとぷりぷり振るオシリを裕也に見せつけていた。

——デブデブって思ってたけど、なんかエロいな……、こいつ……。

性的な魅力でいえばモデル体型の百合子や、おっぱいの発育が目立つ真奈が居る。かわいらしさなら成美のようなジュニアモデル経験者や、深窓の令嬢の澄子がいる。

みなみは少し太った印象だが、笑うと可愛いし、おっとりした雰囲気が安心する。

そして目の前でぷりぷり振るおしり……。

普段なら他の子に目移りして見過ごすのだが、こうして目の前で、触れそうな距離にあると気持ちが昂る。

ちよつと手を伸ばしてみようか。すごく柔らかそう。いい匂いもするし、舐めてみたい。

それよりも、もつと何かしてみたい。学校の裏手で拾った本のようにしてみたらどうなるだろう。あの本では女性に男性のモノをあてがったりしていたが、みなみならしてみても怒らないかもしれない。

「……あれ、誰か呼んでるぞ。待ってる」

「え？ あうん」

振り返り、階段を急いで降りて倉庫へ行く。そしてぴしゃりと閉める。

「どうして閉めるの？」

「なんか砂埃が入ると困るんだってさ」

「ふーん」

これで邪魔者はいらない。裕也は急いで階段をどたと大きな足音を立てて駆け上がる。

取り外しができる立てかけ型の階段はぐらぐら揺れるので、みなみは驚いて階段にすがりつく。

「わわ、裕也君、あんまり揺らさないで。怖い……」

「大丈夫か？ ほら、掴まれよ」

「あ、うん、ありがと……」

背後に忍び寄り、彼女を支えるふりをする裕也。背後から抱き着く格好になり、彼女の甘く少し酸っぱい体臭を嗅ぐ。

「登れるか？」

「えと、わかんないよ」

「なんだよ、じゃあ、押してやるから、よいしょと……」

裕也は彼女の股に手を忍ばせると、パンティ越しに股間に触れる。

「んっ……あ、ね、ちょっと裕也君？ そんなとこ触っちゃ……その」

のんきな彼女だけれどさすがに股間を触られることは恥ずかしいらしく、驚いたように声を上げる。

「後がつかえてるぞ。ほら、早く登れ」

裕也はどぎまぎしながらみなみを急かした……。

